日本語教育実践研究（８）

―「日本語音声教育」の実践―

戸田　貴子

日本語教育実践研究（８）では、音声教育実践実習を通じて日本語の音声教育について研究します。

日本語音声教育は、文法・表記・聴解・読解などの他分野に比べて教材が少なく、開発途上の分野であると言えます。音声教育の方法論に関する議論も比較的少なく、音声シラバスは今までほとんど検討がなされてこなかったと言っても過言ではありません。しかし、実際に日本語を教えてみると、外国人学習者の日本語発音には母語話者とは全く異なった音声上の特徴があり、日本人の聞き手にとって聞きづらくわかりにくい場合があるということに気がつきます。また、発音だけではなく、学習者の聞き取りにも母語の特徴が見られます。日本語教育の現場でも、「学習者の発音がなんとなく不自然だが、どのように指導したらいいのだろうか」という疑問を持つ日本語教師が多いように思われます。

日本語教育実践研究（８）では、まず、複数の外国語と日本語との対照研究を行い、学習者の母語と日本語との音韻体系の違いについて考察します。それが、学習者による日本語の発音にどのような影響を与えるのかということについても考えていきます。実習では、初級後期終了から中級前期の学習者を対象とした発音クラス（発音指導Ａ：レベル３－４）の授業を見学し、グループに分かれて個別指導を行います。実習後は、音声分析・自己分析に基づいた実践報告と授業見学による相互評価・意見交換が行われます。このような作業を通じて、「学習者の発音がなんとなく不自然だ」という漠然とした聴覚印象が、客観的かつ分析的な捉え方に変化していきます。

実習生は効果的な発音指導ができるように、実習のための準備や補助教材の作成、また、授業時間外でのディスカッションに多くの時間を割いてきました。その中で、日本語学習者の発音に対する意識化やモニター能力の育成に大きな役割を果たしました。このような日本語学習者の変化の過程からは、日本語教育関係者も多くの示唆を得ることができます。実践研究が、教える側と教えられる側の立場に分かれてしまうのではなく、別科生、実習生、担当教員が共に学びあう場であることを願ってやみません。

（トダ　タカコ・日本語教育研究科助教授）